

## 徳姫の生きた時代（短歌集）

安達 真魚



少女時代の徳姫（生成 AI にて作成）

### ■ 序文

いわき市内郷白水町広畑には、福島県で建造物として唯一  
国宝に指定されている国宝「白水阿弥陀堂」がある。平安時  
代後期の1160年、岩城の国主岩城則道（いわきのりみち）  
の妻徳姫（とくひめ）が、則道の死後剃髪して徳尼御前とな  
り、菩提を弔うために願成寺（がんじょうじ）と白水阿弥陀  
堂を建立したとされている。同地の真言宗智山派の寺院、願  
成寺が所有する。

白水阿弥陀堂は昭和の発掘調査によって、池を含む浄土式  
庭園を伴った寺院であることが明らかになり、平安時代の東  
北地方南部の代表的な阿弥陀堂として、国の史跡に指定され  
るとともに、庭園復元事業が進められ、創建当初の姿に復元  
された。

阿弥陀堂の建物自体は、平泉の中尊寺金色堂に模したもので、  
金箔は塗られていないものの、美しい造形を見せてくれる。  
周りに池を配した様子は、浄土式庭園そのものであり、  
毛越寺のニュアンスを継承し、異次元の世界に導いてくれる。  
ちなみに、池越しに仏教建築物を望むことができる主な浄土

式庭園には、他に平泉無量光院、宇治平等院、浄瑠璃寺、鎌倉永福寺などがある。

この徳姫であるが、地元ではすこぶる知名度が高い。平泉から岩城に嫁いで、国宝になるような阿弥陀堂を建立したことが大きく後世の人々の心に残ったからであろう。以前、いわき市では、源義家、岩城則道、徳姫、安藤信正（磐城平藩主）など地元ゆかりの歴史上の人物に扮した芸能人がパレードする時代まつりが行われていたことがあった。そのなかで、主役は、いつも岩城則道と徳姫だ。また、地元商工会では、「徳姫ちやま」という歴史ゆるキャラを企画して、地元振興に役立てている。

徳姫は、平安末期に生存した人であり、歴史上登場するといっても詳しいことがわかっていないわけではない。女性ということもあるし、日本の歴史全体のなかで重要性が高いわけではないので、彼女の足跡は一部を除き謎が多い。一方の夫とされている岩城則道は、岩城氏の始祖と云われるが、彼の事績もほとんど不明だ。しかも、この二人が生存したと思われる年代は一世紀ほど違う。二人が夫婦であるという記述は、数多く見受けられる一方で、この年代の違いを指摘されてい

る人も多い。

昨年（2022年）、「流れ星ひとつ」という曲を自作している。内容は、徳姫にちなんだものだ。もともと原作は「TOKUHIME」で、詞は、本誌18号のく時を超えてくに掲載されている。間奏のエレクトリック・ギターのソロもうまく収まっていて、自分の、お気に入りの曲の一つだ。

詞：<http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/img/kusano-18.pdf>

曲：<https://marukiyowork/fifth%E3%80%8Curashima%E3%80%8D/>

この曲の説明で、この姫の生まれ故郷は京都の可能性が高いと書いてしまったが、後で、これが間違いであることに気づいた。創作なので、それはそれでいいかと思ったりはしているが、これをきっかけに、自分が思っている彼女の生きた時代のイメージだけでも記述しておいた方がいいと思い、本文を書くことにした。

したがって、史実というようなレベルではなく、多くは想像を含む自分の思い描いたストーリーを記述したものであることをお断りしておく。さらに、ストーリーの展開にちなんだ短歌を自作して、短歌集という形にした。現在の言葉づ

かいで、かつ稚拙な内容であることをご容赦いただきたい。  
なお、「石城」「岩城」「磐城」「いわき」の表記の違いについてであるが、時代や使われ方によって、さまざまな表記がされてきたようである。本文では、明確に適切だとわかる場合以外は、「岩城」と表記した。

## ■ 常陸平氏

将門の乱以降、平貞盛の子孫が繁栄し、常陸一円に勢力を広げ、常陸平氏と呼ばれた。多気権守多気致幹(むねもと)は、常陸平氏の一族として、筑波郡多気(筑波山の西麓、南麓一帯)を支配していた。現在のつくば市北条がその拠点だ。この一族は、常陸大掾職を継承する一族でもあった。

源頼義は、前九年の役に勝利し、京都への凱旋途中に、筑波のこの致幹の館に宿をとった。常陸平氏の多くは、何か軍事的な徴発があれば、源家などの配下になって動員されるが、致幹もその一人であった。宿泊の際、頼義と致幹の娘が一夜

を共にした。頼義が見染めたのか、致幹が旅のなぐさみにと配慮したのであろう。この一夜の契りで生まれたのが徳姫である。河内源氏の嫡流と常陸平氏一族の血が流れた貴種といわれる女子の誕生だ。源義家や源義光などとは異母兄弟に当たることになる。前九年の役を終結が1062年9月で、その年のうちに京に向かっているので、徳姫の生まれ年は、1063年の可能性が高い。

致幹にとつては、頼義の娘であるといっても、かわいい孫娘であり、大切に育てられたに違いない。京生まれではないが、長じて、容姿端麗、気品のある美人であったことは、容易に想像できる。また、常陸大掾職を継承する大豪族一族なので、小さい頃からずっと何不自由のないお姫様であったであろう。しかし、この誕生は、少なくとも頼義在世中は、秘されていたようだ。

玉のよう 尊き方の 落とし種

多気の里に 春が来たれり

あどけなく 笑顔振りまく 純真さ

## 季節の中に 輝くばかり

夕やけに 見上げる先は 西の空

何想うのか 小さな心

### ■ 夫婦養子

徳姫が幼少から適齢期にかけて、陸奥の国はどのような情勢であつたらうか。

前九年の役の後、頼義を助け、戦の勝利に最も貢献した清原武則が鎮守府将軍に任じられ、実質的な陸奥の支配者となつていた。鎮守府将軍は、奈良時代から平安時代にかけて陸奥に置かれた軍政府である鎮守府の長官である。鎮守府は、陸奥国府のある多賀城から離れた胆沢に置かれていた。鎮守府将軍は陸奥国と出羽国の両国に駐屯する兵士を指揮していた。武則亡き後、その子武貞が跡を継いだ。その武貞も亡くなつた。武貞には、真衡、清衡、家衡の3人の男子がお

り、年長の真衡が清原を継いだ。しかし、この3人はそれぞれ複雑な事情を持つていた。真衡は正当な世継ぎであるのだが、多くの側室がいても子供に恵まれていなかった。家衡は、3人のなかで一番若い。母は、前九年の役で敵であつた安倍頼時の娘で、藤原経清の妻であつた有加一乃末陪（ありかいちのまえ）を武貞が妻とし、生んだ子であつた。清衡は、藤原経清と有加一乃末陪の子であり、武貞にとつては継子である。家衡とは、異父兄弟であり、家衡より年長である。

真衡に世継ぎがないとなれば、弟を養子にして、後継者とするのが普通であらうが、この弟二人を後継者とする事はなかつた。かつて敵であつた者を母に持つ弟たちには継がせたくなかつたのだろうか、とてつもないことを考えた。海道平氏の海道小太郎・成衡を養子とし、筑波多気の常陸平氏の多気致幹の孫娘・徳姫を嫁がせ、夫婦養子として迎えることを画策したのだ。真衡にとつては、この平氏一族の子弟と常陸平氏でも河内源氏の嫡流の血を受け継ぐ徳姫を迎えることによつて、清原の家格を高めることも目指していたといわれている。

もともと清原氏は、海道平氏一族とは縁戚関係が深いとい

われている。清原氏も海道平氏も出羽守であった平安忠の子孫である。清原武則と岩城則道は兄弟であった可能性も高い。真衡が海道平氏の成衡を養子とするのは、近しい縁戚からの養子縁組なので、さほど不自然さはない。しかし、一族には多くの反発があった。最も不満の大きかったのは、武貞の実子であった家衡であろう。清衡については、父がかつての敵方で、清原の直接の血も受けていないので、家衡より年長であつても、継ぎ養子となる資格は全くなかつた。

多くの反対がありながら、この縁組は進められることになつた。多氣致幹は、真衡からの申し入れを受け、都にいる源義家の承諾をとつた上で、この縁組を受諾した。これによつて、多氣では、ちょうど適齢期になつていた徳姫の婚儀の準備が進められた。

1083年早春、徳姫は主だつた親族、従者とともに、陸奥国胆沢（岩手県奥州市）の地へ向かつた。実際には、胆沢から近くの、真衡の拠点であつた白鳥の館（たて）になる。筑波から胆沢への行程は、浜街道を利用したとすれば、筑波、石岡、岩城、多賀城、胆沢の可能性が高い。途中、成衡との対面を果たしたかもしれない。海道平氏も常陸平氏の流

れを汲んでいたといわれているので、成衡と徳姫は遠い親戚にあたる。

つくばやま 旅の始まり ヤマボウシ

胆沢の空に 無事を祈る

峠越え まだ見ぬ君へ 送りたい

耳を澄ませて 聞く山響き

旅の果て 胆沢の城は 田村麻呂

いにしえからの 鎮守の証し

かの君の 直垂姿 似合えども

確信できぬ 我がこころあり

呼ぶ声も 届かないほど 息絶えて

どこまで広い 胆沢の空は

## ■ 後二年の役

成衡と徳姫の婚儀は、武貞の葬儀がとり行われた後、日を置かないで行われた。都など遠方の客の便宜を図ったもので、二つの儀式をまとめて片づけてしまうのが狙いだ。後三年の役の発端は、この婚儀でのちよつとした事件であった。

真衡の義理の叔父にあたる吉彦秀武が祝いに訪れていた。祝いの砂金を盆に持って頭上に捧げ、真衡の前にやってきたが、真衡は囲碁に夢中になって無視していた。これに秀武は大いに怒り、砂金を庭にぶちまけて、出羽に帰ってしまった。真衡は、この秀武の行為を許せず、直ちに秀武討伐の軍を起こした。一方で、秀武は、家衡と清衡に対して、真衡を討伐することを促した。

真衡が出羽に向かつて出陣したことを見計らって、家衡と清衡は、少ない兵力ながら真衡の館を襲撃した。家衡は、真衡の館に向かう途中、白鳥村を焼き払った。清衡は真衡の館にいた成衡と徳姫の夫婦を清衡の江刺の館に連れ去り、人質とした。これを知った真衡は、すぐに軍を引き返した。家衡と清衡は、決戦を避けて、それぞれの本拠地に戻ったため、

真衡は戦わずにして、家衡と清衡を退けたことになり、再び、秀武討伐の準備を進めることになった。

秋になって、源義家は陸奥守として、国府の多賀城に赴任してきた。真衡は、多賀城にて義家を大いに歓待した。国府が介入して、自分の味方になることを期待した。その後、真衡は館の備えを十分にした上で、再び出羽に出撃した。家衡と清衡は、好機とみて、再び真衡の館を攻撃する準備を整えた。しかし、出羽に向かつて進軍していた真衡は、病のために急死してしまう。義家の手の者に暗殺されたという説もある。事態收拾のため義家は、国府軍を率いて胆沢に陣取った。家衡と清衡は、これに対抗するため国府軍に戦いをしかけたが、敗退し、降伏した。このとき、人質であった成衡と徳姫の夫婦は、義家のもとに引き取られた。

真衡の死後、義家は、真衡の所領であった奥6郡のうち、南の3郡を清衡に、北の3郡を家衡に分与する裁定を、朝廷の名のもとに下した。さらに、白鳥村を焼き払った家衡に対しては、年貢倍増の罪を加えた。南の3郡の方が北の3郡より豊かな土地であったことに加え、年貢の収納についても清

衡がとりまとめで行うことになり、明らかに清衡に重きをおいた処分であった。

この裁定後、しばらくは平穏な日が続いた。しかし、家衡は処分に対する不満と清衡に対する恨みを持ち続け、復讐する機会を待っていた。

義家のもとに引き取られた成衡と徳姫は、一旦、清衡の江刺の館に戻された。二人にとつては、真衡の死後、清原氏として相続すべきものもなく、帰るべき館もなくなったため、清衡の世話のもとで暮らし続けることになった。清衡としても、義家の妹夫婦をおろそかに扱うことはできず、家族同様、丁寧にあわれた。この頃から義家と清衡との間には、一定の信頼関係が生まれていた。

その後、機会を窺っていた家衡は、味方の兵を計画的に集め、清衡が江刺の館を留守にするときを狙って、江刺の館を襲撃した。館にいた妻子を人質にして、戻ってきた清衡を亡きものにしようと画策した。しかし、これは成功せず、清衡の妻子は無残にも全員殺されてしまった。清衡が死ねば、清衡の遺領はすべて自分のものになるという家衡の計画は失

敗に終わった。このとき、同じ館にいた成衡、徳姫は無事であった。家衡にとつては、この夫婦は不要な者たちであったが、ここで殺してしまえば、徳姫の兄である陸奥守義家の限りない反感を買うことは明らかであり、これは避けなければならないかった。

家衡は、襲撃の後、本拠地の沼柵（秋田県横手市雄物川町）に立てこもった。義家は、清衡の訴えを受け、自ら下した裁定に反逆して清衡を殺そうとした家衡を討伐すべく、清衡とともに沼柵に向かった。しかし、準備不足と季節が冬であったため、義家・清衡の連合軍は、敗退した。

年が明けて、1087年、家衡は叔父の清原武衡の誘いのり、武衡の本拠地である、より堅固な金沢柵（秋田県横手市金沢地区）に移り、立てこもった。義家・清衡の連合軍は、義家の弟である義光の都からの来援もあり、数万の兵を動員して金沢柵を包囲した。金沢柵は激しい攻撃にも抵抗したが、吉彦秀武の献策による兵糧攻めによって、陥落した。家衡は逃走しようとして討たれ、武衡は捕らえられて斬られた。このときの敗者に対する処遇は過酷なもので、ほとんどの清原

軍の兵や妻子が虐殺された。ここで、この合戦は終了し、前九年の役以降、陸奥の支配者であった清原氏は滅亡した。

後三年の役に勝利した義家だが、朝廷からはこの戦いが清原氏の私闘とされ、何の恩賞も受けることがなかった。配下として戦ってくれた板東をはじめとする多くの将士たちには、私財を投じて報いなければならなかった。ただ、このことが、子孫である義朝、頼朝らが成しえた坂東での三河源氏を中心とする武士団形成の大きな要因になった。

義家は、八幡太郎の通称で知られる武将である。前九年の役、後三年の役における働きなど数多くの伝承や伝説が残されている。

義家が、後三年の役の終結後、京に戻る途中、勿来の関で詠んだ有名な和歌がある。

吹く風を なこそこの関と 思へども

道もせに散る 山桜かな

勿来の関は陸奥への入口の関にあたる。「なこそ」は来るなという意味であるが、陸奥守の任を解かれて陸奥を去っていく義家にとっては、ずっと思い描いていた陸奥の国への思

いと決別であったのだろう。その後の義家の人生は、朝廷内での立場も芳しくなく、一族内での紛争などもあって、必ずしも順調であったとはいえない。ただ、子孫である源頼朝が鎌倉幕府を開くまでの過程などにおいて、義家の陸奥での働きが大きな影響を及ぼしているのは前述したとおりだ。

いく年も 慕い続けた 異母兄の

溢れた笑顔に 父を重ねる

駆け引きの 道具になりし 江刺の地

暮らしそつなし 思いのままに

母子とも 炎のなかに 消え去りぬ

南無阿弥陀仏 切なさ誘う



## ■ 江刺から平泉へ

後三年の役の後、清衡も何の恩賞もなく、官位を受けることもなかった。ただ、主だった清原氏の統率者は亡くなった。成衡にしても真衡の死後の清原氏を継承するのは任が重すぎた。必然的に、清衡は、清原氏、安倍氏の生き残りとして、また実力者として、奥州全体を束ねる統治者の地位を築いていくことになった。

成衡と徳姫については、もともと真衡の養子であるので、清衡にとつては義理の甥と姪である。改めて家族の一員に加えたであろう。妻子が殺されてから間もない時期だけに、同じ館で暮らしている義理の家族として歓迎すべきことであった。また、この扱いは、都の義家に対しての配慮でもあったと考えられる。なお、成衡については、後三年の役の最中に討ち死にした説や下野国塩谷郡で、義家の勘気を被り討伐された説がある。

成衡と徳姫は、後三年の役の後も江刺の館に居住した。奥州は大きな戦はなく、しばらくは平和な時代が到来した。改めて、平穏な新婚生活を送っていたかもしれない。一方で、

清衡とその配下は、新たな統治の枠組みを構築するため、繁忙を極めたことであろう。成衡も配下の一人として、それらの執務にあたっていたかもしれない。

成衡は、岩城へ戻れば、岩城氏の当主になるべき人であり、清衡が奥州をまとめあげていくのにも必要な人材であった。清衡にとつて都合のよかったのは、岩城の所領を成衡に安堵し、平泉の旗下として陸奥の浜街道最南部の岩城を統治できることであった。当時、源義光は、岩城の菊多郡を拠点に常陸の北部で勢力を拡大しつつあった。後の佐竹氏である。奥州側の清衡にとつても、この勢力と良好な関係を築いていく必要がある、岩城氏にとつても同様であった。

成衡は、機を見て、清衡の負託を受け、岩城の地に赴いていった。成衡との間にはすでに子供がいた可能性も高く、岩城で妻子を迎え入れる準備もしなければなかった。成衡は、その後も清衡のもとにいた徳姫と岩城の間を何度か往復していた可能性が高い。

清衡は、江刺（江刺郡豊田館）から平泉に宿館を移した。この平泉進出は、陸奥北部を開拓し、蝦夷との境界を津軽海

峡まで北進させるといふ国策と深く関係していたと云われる。また平泉は、水陸交通の要衝の地であり、すでに任官していた押領使として、奥羽両国を押領しようとする意思表示であったとされる。実際に移ったのは、1099～1104年頃で、そのあと、中尊寺の造営が着手された。

清水の 湧きあがる里 平泉

極楽浄土 世は平らかに

世はまさに 光輝く 金色堂

思いのままに 時代は移り

都から 遠く離れた みちのくの

仏の世界 四方八方に

白鹿の お告げ伝えし 毛越寺

華麗なる池 延年の舞

野に響く 新たな都邑(とゆう)の 槿音に

遠く離れた 我が君のこと

■ いわき平

徳姫が岩城に向かったのは、すでに40歳近くのことです。すでに中尊寺の造営も着手されていた。何人かの子供たちを従えての旅立ちであった。徳姫にとっては、このような旅立ちには、多気の里から胆沢に向かった婚儀のとき以来である。清衡にとっても、長年いっしょに暮らしてきた徳姫やその子供たちとの別れは、大いに寂しいものがあつたであろう。すでに徳姫は清衡の養女であり、改めて岩城への嫁入りであった。

平泉から岩城へは、女、子供中心の旅であるので、10日あまり要した。出迎えた岩城氏一族や岩城の人々からすれば、徳姫は、年も若くもなく子供もいるのだが、高貴で気品のあつる、平泉からの花嫁に見えた。

常磐線いわき駅（旧平駅）のすぐ北側は高台のへりになっていて、江戸時代の初め、鳥居忠政が築城した磐城平城の城址がある。そこにはもともと飯野八幡宮があったが、築城時に遷宮し、現在は数百mほど西の人幡小路にある。岩城氏は、岩城四十八館と呼ばれるように、周辺各所に一族の拠点を置いているが、この磐城平城があった場所こそ、もともとの本拠地であった。徳姫の時代もこの場所だったと思われる。いわゆる「いわき平」と呼ばれる夏井川とその支流流域の、平坦な低地が眺望できる場所である。

群馬県生まれの明治、大正時代の詩人、山村暮鳥（ぼちよ）の有名な詩「雲」がある。徳姫の時代から変わらない原風景が描写されている。

おうい雲よ

ゆうゆうと

馬鹿にのんきそうじゃないか

どこまでゆくんだ

ずつと磐城平の方までゆくんか

飯野八幡宮の社伝には、「康平6年（1063）源頼義が奥州合戦（前九年の役）出征の時、京都石清水八幡宮を必勝祈願のため勧請したという。（中略）室町時代には神領の減少が見られたが、菊田・磐崎・磐城・檜葉・標葉の岩城五郡の総社として、岩城氏を始め一般庶民からも厚い信仰を受けた。」と記されている。かつて、徳姫の父である頼義が、この地を訪れ、必勝祈願をしたというのも何かの縁であろう。

聞きたくて 声主のもと 近づくも

姿は見えず 夢の彼方に

松が浦 我が思う程に 波高く

今も忘れじ 潮騒愛し

晩秋の 浜海道は いつになく

脚どり軽く 紅葉色づく

岩城へは いづくの道ぞ かもめさえ  
なぞる遥かな 午のあたりへ

夏井川 渡れば平 冬支度

岩城の里は 賑わいのなか

## ■ 成衡の死

このころ、陸奥菊田荘（いわき市南部）を支配下においた源義光は、常陸の奥七郡へも領地を広げていた。1106年には、常陸大掾上総介平重幹と組んで、下野国源義国（義家三男、足利氏、新田氏の祖）と戦っている。常陸合戦である。成衡も、清衡との関係もあり、義光の要請で、岩城から参戦していたのではないだろうか。このとき、成衡は下野国塩谷郡氏家・風見館で討ち死にしまった。義家の勘気を被ったというのはこのときかもしれない。51歳で死亡したという説もある。この悲報は、徳姫や子供たちにはすぐにもたらされたことであろう。

海道小太郎・成衡は、後三年の役の発端になった人物とし

て、関連する文書には、必ず登場する人物であるが、彼の足跡はほとんどわかっていない。ただ、成衡は、5子の親として、岩城氏の系図上（系図上は隆行と記されている）に残されている。死後それぞれに領地が分与されていくことになるが、多くの子を授かったことは、その後の岩城氏の繁栄の礎を築いた人物であったともいえる。

領地分与といっても、主導的な立場にあつたのは、徳姫以外にいなかった。平泉の威光も大きく、子供の領分を決めていくのは自分しかいないと思つたはずだ。第一子隆祐は檜葉郡を、第二子隆衡は岩城郡を、第三子隆久は岩崎郡を、第四子隆義は標葉郡を、第五子隆行は行方郡を所領とした。宗家を継いだのは第二子隆衡であった。

徳姫がいる限り、領地分与した子供たちの統制も充分とれていた。さらに、徳姫は、新たな田園の開拓にも尽力していた。平泉の後見もあり、徳姫在世中は、この地域の政治の中心は、徳姫にあったともいえる。また、皮肉にも、成衡の死後の何十年かは、岩城氏が最も繁栄した時代だった。

戦地への 道のり遠く 見送りて

御守り一つ 無事を祈る

胸騒ぎ 知らせ悲しく 立ちすくむ

こころ乱れし 暗闇のなか

### ■ 平泉への憧憬

徳姫が岩城の地に移り住んで以降も、平泉の建設は少しずつ着実に進んでいた。中尊寺も完成し、基衡の時代になり、観自在王院の造営も始まっていた。徳姫のもとへも、ことあるごとに、それらの様子が知らされていたはずだ。平泉がどのように発展しているのか、有様を目の中に浮かべていく日々であった。そして、岩城の地も平泉になぞらえて、見ていたように思う。

高台にあった岩城の館の周囲は、東に夏井川、北に夏井川の支流の好間川が流れ、南には、やはり夏井川の支流の新川

が流れている。これらの川は、すべて阿武隈山地を水源としている。とくに南側の新川流域は、平坦な田園地域が広がっていた。「いわき平」と呼ぶにふさわしいものであった。

眼下の新川を川上へしばらくたどって行けば、阿武隈山地のふもとにたどり着く。そのふもとの近くに、川の出口の東側を除く三方が山で囲まれ、ぽつかりと空いた平坦地がある。落ち着きのある、居心地の良さそうな場所だ。現在の地名では、いわき市内郷白水町広畑である。この土地を平泉の泉を分解して白水と名付けたといういわれがある。すなわち、新川のここから東側の平坦地を「平」、西側を「白水」と呼ぶようにしたということだ。白水の名は、阿武隈山地からの水が清水であったことも由来の一つとされている。ちなみに、「平」というのは、平氏の平や、平坦地の平という説も有力である。

徳姫は、岩城に住んで以来、館のある平から白水まで何度も訪れていたことであろう。平から白水までは、子供の足でも容易に日帰りできる距離である。この新川をたどる道は、周囲が田園地帯であり、民の暮らしもよく観察できていただろうと思う。平泉では、奥州の都づくりも最終段階になって

いたこともあり、この平から白水まで往来を通して、この白水の地にも、平泉に模した建造物を造営しよう決意したに違いない。

### 新川の 川の流れに 逆らいて

#### 明日へ架ける 尼子の御橋

### 常盤路の 奥に入山 山遊び

#### 大市姫命(おいちひめのみこと) 心やすらか

#### ■ 白水阿弥陀堂

新川も、夏井川も、人々に大きな恵みを与えてくれている川である。しかし、多雨期には甚大な水害をもたらす危険な川でもあった。いわき市平といわき市内郷の境界付近に、県道20号線(旧国道6号)がこの新川を横切っている箇所がある。当時、この近辺では新川が一旦氾濫すると海のように

なり、平と内郷間の往来ができなくなっていた。この難を救うために、徳姫が資金を出して、架橋させた。夫の死後、徳姫は剃髪して徳尼御前と呼ばれていたもので、完成した橋は、「尼子橋」と呼ばれた。現在の尼子橋は、この尼子橋の上流約250mに位置する県道20号(旧国道6号)に架けられている。旧来の尼子橋も昭和58年に架け替えられ、白水阿弥陀堂の浄土式庭園の池に架けられた朱塗りの橋と同じ形状となっている。

徳姫は、夫の菩提を弔うため、白水に阿弥陀堂を造営することを発願した。菩提を弔う対象は、夫のみでなく、岩城氏一族の代々の霊に対してであると同時に、自分がこれまで生きてきた間に亡くした全ての霊に対してでもある。資金供出についても、夫の菩提だけの名目では、一族周辺の理解を得るのは難しかった。そこで、岩城氏始祖の則道の霊を筆頭に祀ることにしたため、則道と弔う側の筆頭である徳姫が夫婦であるかのように誤解され、後世に伝わってしまったのではないかと推測される。

造営するものは、菩提を弔うため寺と、仏教の浄土思想に

基づき、阿弥陀如来が住まう極楽浄土を具現化した広大な浄土庭園と阿弥陀堂である。これらの様式は、平泉の影響を色濃く受けたものというより、模倣したものといえる。金箔は施されていないものの、堂の形状は、平泉金色堂とそっくりだ。

しかし、徳姫のその願いはすぐに実現できるものではない。まず、資金の調達が最重要課題であったはずだ。その裏付けを基にして、計画して実行する人材と、実際に金色堂を造営した技術者を、平泉から呼び寄せる必要があった。また、木材などの建築材料も調達しなければいけないし、仏像を製作する仏師や壁に極楽浄土を描くための絵師などを集めるのも大変であったに違いない。残念ながら、現在では当時の壁画などはほぼ失われている。寺（現在、真言宗智山派菩提山願成寺）を含めて、完成したのは、1160年と云われる。徳姫は、このとき90歳半ばになっていた。当時としては、相当に長生きした人であった。

白水阿弥陀堂の造営資金を、地方の豪族が単独で捻出することは大変なことであった。徳姫には、企画力に加えて、財力とそれを執行していく力があつた。地元の郷土史では、徳

姫を「当時のいわきの文化に功績を残した偉大な人物である」と賞賛している。しかし、文化面のみでなく、女性ながら政治、経済、その他社会事業全般に至るまで、残した功績は大きく、それらを見直す必要があるだろう。

徳姫の享年は不明だ。徳姫の死後、奥州も時代は次第に移り変わっていった。義家の子孫の頼朝が伊豆で挙兵したのは1180年で、その後鎌倉幕府を開いている。奥州藤原氏も泰衡の時代になり、1189年に滅亡した。

#### 阿武隈の 南の果ての 湯の岳の

その麓（ふもと）なり 白水の里

黄金色 新川沿いに たどり行く

秋色染まる 阿弥陀堂

新緑の 山は萌えても 藤の花

薄紫の 匂いを誘う

池越しに見ゆるお堂は 我が君の  
在りし日姿 想い起さる

お御堂の ほのかな灯り 誘われて

輝き放つ 柄杓(ひしゃく)星見る

## ■ 結び

2023年9月8日から9日にかけて、台風13号はこの地区に未曾有の水害をもたらした。新川の支流を含めた、主に上流域で多くの浸水箇所が発生した。白水阿弥陀堂も泥水の上に堂の上部が見えるくらいになるまで、域内全体が水没した。堂内に安置されている重要文化財の仏像には被害がなかったことと、比較的短期間で拝観再開できたのが、不幸中の幸いであった。

阿弥陀堂の入口から願成寺に向かって歩くと、白水常盤神社の鳥居が見える。鳥居をくぐって、やや急な階段を上る

と、白水常盤神社がある。この神社は、大市姫命(おいちひめのみこと)である徳姫(徳尼)を祭神とした神社で、当初阿弥陀堂境内東側に祀られていたが、明治維新の神仏分離令により現在の場所に移設されている。高肉彫の鉄製懸仏聖観音像は、鎌倉時代後期に作られたとされている。のぼり旗はピンク地で、恋愛成就、夫婦円満、慈愛の杜、白水常磐神社と書かれている。

知人の家でこの神社を管理しているので、その存在を知っていたし、参拝した記憶もある。しかし、恥ずかしいことに、この文章を書こうとするまで、徳姫が祭神だという認識がなかった。神社の由緒書きも見ていると思うので、真剣に見ていなかったか、忘れていた、というのが正直なところだ。

この神社の存在やいくつかの伝説でもわかるように、徳姫の遺徳は、後世にまで伝えられている。彼女の慈悲深さは、彼女の生きた時代を通して、自然と醸成されたものである。

徳姫の生きた平安末期の東国や奥州では、貴族や在地領主の武士などの勢力争いが続いていた。本人も何度か争いの中で、手痛く翻弄された。これらの時代背景を乗り越えて、阿



弥陀堂を造営することによって、極楽浄土を具現化した。彼女が希求したのは、互いに憎しみ合うことではなく、愛が溢れ、人々が豊かに安心して暮らせる平和な世界の到来ではないだろうか。すべての人が共有すべき願いである。

そよ風に 萌える緑は まぶしくて

たゆまぬ命 今惜しみなく

生き生きて 昔の友の 声遠く

岩城の里は 今日も晴れやか



白水阿弥陀堂

## トワイライト世代 その3

安達 真魚



つくば市北条平沢官衙遺跡

### いつの間にか鉄塔

車を運転していると、送電線の鉄塔とは異なる、ちよつとした鉄塔をよく見かけるようになった。というより、多くの鉄塔が立っていることに気づいたといった方がいい。それも、街から離れた位置が多い。これらのちよつとした鉄塔は何者なのかと疑問をいだいた。階段もあり、人が上って何かできるようなスペースもあるので、最初は火の見やぐらだと思っていた。例によって、グーグルマップを開き、その周りに消防施設などがないか確認した。しかし、それらの鉄塔が立地しているのは、山の中など低利用地が多く、消防署の併設物でもなさそうだ。

「あ、そうか、携帯電話の基地局だ」と気づくまで、疑問に感じてから少し時間を要した。モバイル端末の電波を送受信するために、各キャリア（移動体通信業者）が基地局の設備構築を行っていることは、以前より、読み聞きしていた。それを具現化したものが、これらの鉄塔なのだ。これらの無線基地局は、街中であれば、ビルの

上などに設置すればよい。街中以外であれば、山の中の見晴らしがよさそうなところに鉄塔を構築して、設備装置を設置するらしい。以前より、気づいている人は多いかもしれないが、自分のように、いつもボーっとしていれば、なかなか気づかないだろうし、全く興味を持っていない人も多いだろう。それにしても、人里近い山野に、いつの間にか、多くの鉄塔が立てられていることに気づかされる。

鉄塔といっても、いろいろな種類や用途のものがあるから、このような鉄塔がすべて電波基地用ではないだろうが、設置場所や、高さ、メンテナンスの階段、頂部の作業エリアなどの雰囲気から、なんとなく電波基地用だと識別はできる。形状、高さなどは、それぞれ違って、何かランダムに配置されている。電柱程度の小型のものも見受けられる。キャリアがそれぞれ最適な位置を決めるなど、綿密に計画した上で、設置事業を行っているのであるが、一般の人から見ると、バラバラで、統一感はない。キャリアが、それぞれの事業遂行のために

設置しているので、当然の帰結なのだろうか。

電波行政という言葉があるが、モバイル系の電波の統制も、国である総務省で行われている。電波送受信設備についても、その管轄下で行われているはずだ。各キャリアは、認可を受けた上で、一部共用しているものを除き、個別にこれらの設備の計画、設置、管理などを行っているのが実情ではないだろうか。モバイル通信の分野は、急激な普及をしてきたという経緯があるので、仕方のない面もあるが、このようなインフラ整備にそれぞれの思惑で事業活動しているのには、何か無駄を感じてしまう。例えば、鉄道や道路事業に関して、同じ路線を複数建設しているようなものだ。通信系統が複数あると、通信障害が発生したとき相互補完できるといって、重要な意味を持つものであるが、過去の通信障害時に、十分補完機能を果たしてきたのだろうか。現在では、モバイル通信のこれらの設備は不可欠な社会インフラであり、国全体として、無駄を省き、効率の良い運用を図らなければならない。民間のみならず、担当官庁の力量に

期待したいものである。いずれにせよ、鉄塔がバラバラでランダムなのは、事業の無駄や統制不足を露呈しているような気がしてならない。

鉄塔が不統一なことに関しては、もう一つ別の問題がある。景観上の問題である。単なる無線基地局の鉄塔であつても統一感を持たせたいということだ。鉄塔は構造物であるから、何らかの設置基準に基づいて構築される。その基準とは、法令で定められる、主に構造物の強度、地盤の耐力、耐震性など物理的なものである。景観的には、加えて、意匠（デザイン）的な要素を加えればよい。色、形状、高さなどの項目だ。地方自治体の景観条例などで定める基準ではなく、やはり基本は国で定めないと統一できない。実現すれば、屋外でスマホを使うときの意識が少し変わるかもしれない。また、高い鉄塔はランドマークにもなる。ただ、鉄塔はすでに出来上がっているのです、それをすぐに更新するわけにはいかない。これから移動通信システムが5Gから6Gに進展していくなかで、基地局のメンテナンス需要も高まってくる。鉄塔を共同利用するケースもでてくる。それらに

呼応して、美的感覚を取り入れた鉄塔のことも考えてもらえたらいいと思う。

第一次安倍内閣のとき、当時の安倍首相は「美しい国づくり」の構想を発表した。政治・経済・外交など課題の多い中でこのようなことを標榜するのは、すごくいいことだと思った。そして、このときまず電線の地中化のことを思い出した。

電線の地中化は、そのときより前から話題にあがっていたが、それが少しでも前進すればいいなと思っていた。しかし、期待したようにはならず、現在になっても、電線の地中化の推進は遅々たるものがある。

電線の地中化、いわゆる無電柱化は、景観、観光、安全、快適、防災などで、多くの利点がある。なかでも、景観が一番重要だと思っている。「美しい日本」が大切なのだ。すでに、無電柱化した国道、観光地など、美しい街並みを残している箇所が数多くある。また、ニュータウンなど大規模な新しい開発地では、最初から共同溝が設置されるなど、良好な景観を呈しているのが普通だ。

一方で、地中化できない多くの地域は、相変わらず見苦しいままだ。例えば、里山である。いくつかの民家とこもりとした裏山と一体となったイメージがあるが、なかなか、いい撮影スポットになりにくいのだ。それは、電柱が邪魔するからだ。また、ちよつとした道路の両脇に広大な田んぼあったとしても、その道端を電柱が並んでいたりと、幻滅を覚えるものだ。

日本は、電線の地中化という点で、先進国の中では最も遅れているらしい。とくに費用の問題など多くの課題はあると思うが、行政の「やる気」の問題である。それと、「美しい日本」を作るという気運も大切である。

先日、筑波山に出かけた帰りに、徳姫（本誌、「徳姫の生きた時代」を参照）の出生地と思われるつくば北条地区周辺に立ち寄ってみた。訪れたのは、北条大池の近くの平沢官衙遺跡（ひらさわかんがいせき）だった。奈良、平安時代の筑波郡の郡衙（郡役所）の倉庫群の遺跡だ。広く小高い丘に数多くの大型の高床式倉庫があったと考えられ、そのうち、3棟の建物が復元されている。

奈良正倉院に似た建物もある。復元されたのは、20年ほど前のことで、地元の人々の散歩コースになっているようだ。

遺跡は筑波山麓に囲まれており、多気城や北条城のあった場所が望める場所である。周囲は主に水田で、広々とした気持ちの良い場所である。たまたま、案内所の人に「広々として、いいところですね。」と問いかけたところ、「そうなんです。ここは、電柱がないんです。」という意外な言葉が返ってきた。整備された遺跡内のことや立派に復元された建物のことではなく、電柱のないことを強調されていた。改めて周囲を見渡し、その言葉に何度も納得した。昔日の日本の村落の原風景なのだろうか。

電線の地中化は、日本が忘れてはならない重要課題である。時間がかかっても取り組んでいかなければならない。送電線とその鉄塔も、当たり前のように空間を占領しているが、それでいいわけがない。地中に埋設できるものは、すべて埋設すべきである。冒頭の移動体通信用

の鉄塔は、性格上、多分地中化することはできない。それでも統制のとれた設置により、景観のダメージを最小に抑えることが重要だ。そして、美しい日本の自然と人間と、その街並みを取り戻せたらいいと思う。

### 生成AIを考える

2020年11月にChatGptがOpenAI社からリリースされた頃から、ChatGptは注目を浴び、大きなブームになっている。ChatGptはテキスト生成AIだが、画像、音楽、動画など他の生成AIも影響を受ける形で、ブームを巻き起こしている。

実際に、自分も初めて使用してみたときは、「これは画期的だ」と思った。質問を理解し、回答を作成して表示された内容を見て、いままで体験したことのない衝撃を受けた。

1970年代頃にPCが出現して以来、PCをベース

としたデジタル技術は、通信技術を融合しながら、数多くのイノベーションを果たしてきた。Windows、インターネット、iPhone、Androidスマホ、SNSの登場などは、ほんの一部の変革の例であるが、数多くのイノベーションが行われ、それらが現在のデジタル技術の基礎になっている。

最近では、zoomやslackなどの技術が、新型コロナウイルス感染症の広がりによって一般化したリモートワークに対応した技術として注目されている。ChatGptをはじめとする生成AIも、これらと同様に考えることができ、それもインパクトの高いイノベーションの一つだととらえることができる。

現在、生成AIに関する書籍が数多く出版されている。各種雑誌においても、繰返し、生成AIに関する特集が組まれている。生成AIの有用性を宣伝し、そのノウハウなどを収録して、販売部数をあげたいという出版社の思惑である。生成AIを開発して提供する会社、利用者、書籍を発行する著作者や出版社など、多くの人が一つの

ビジネスチャンスとしてとらえている。しばらくの間は、このような状況が続くそう。

そんな中で、我々一般人は、どのように対処していけばいいかを考える必要がある。生成AIを使用する目的は、業務の効率化や活動の指針を得たりしたいなど、いろいろあると思う。ビジネスとしては、業務や仕事の効率化のためのものが、多いと思う。したがって、このような業務に無縁な人や、仕事をリタイヤした人などは、このブームを静観していてとくに問題はないと思う。有用さを感じて勉強したい人は、書籍などを参考にして勉強すれば良い。生成AIに関する書籍は、そのノウハウなどを伝えてくれるものだと考えれば、納得できる。

PCが一般に普及してはじめて頃、PCを使用しない人にPCの操作を教えても、あまり意味がなかった。現在の生成AI技術も、それと同じようなことがいえる。

生成AIが画期的なことなのかを実感するには、実際に使ってみる必要がある。たまたま、業務のなかで、実際に試してみる機会があった。あるテーマに対して簡単

な教材テキストの作成と、その理解度を確認するための○×式のテスト問題を10問作成することを、生成AIに委ねてみたのだが、適切に要点をまとめてくれた。テスト問題についても、難なく10問作成してくれ、修正するような箇所もなかった。以前であれば、ゆうに半日から1日くらいかかる作業であったが、生成AIの回答に要する時間は、瞬時というには大きさが、ほんの少し待っただけであった。また、作成された内容も、十分満足いくものであった。これだけの知識をまとめてあげて、回答していることに驚かされた。

生成AIは生身の人間ではないのだが、人間らしい応答もしてくれる。最後に、回答してくれたことのお礼の言葉を述べるようにしているが、生成AIは、そのテーマに対する問題点や、今後の課題などをまとめながら、丁寧に返礼してくれたりする。また、他の質問で、うまく回答できないときだったが、謝ってきたりもする。生成AIとはいえ、なんと人間臭いのだろうと感心してしまう。

実際に、生成AIを使用してみることになったら、最初の一步として、いくつか勉強することや注意点があるので、要点をまとめておきたい。詳細については、書籍やネット上の記事を参照していただきたい。

① 生成AIには、いくつかの種類があるので、無料有料を含めて、自分に良さそうなものや利便性の高いものなどを見極めることが大切だ。まず、無料で使用できるものから始めるのが無難だ。

② 生成AIは、ネット上にあるデータを学習して回答している。また、質問、問い合わせの入力データも学習の対象である。したがって、質問、問い合わせに、機密事項やプライバシーに関することを入力してはならない。

③ テキスト系の生成AIが回答するものは、正確であるとは限らない。したがって、そのまま利用してはいけない。利用する場合は、必ず検証する必要がある。

④ 生成AIが生成するコンテンツは、著作権を侵害する恐れがある。とくに、画像系の生成AIで作成されたものは注意が必要だ。判断は難しいが、使用にあたっては、慎重を期す必要がある。

⑤ 質問や問い合わせのテキストなどを作成することをプロンプトという。これによって、生成されるもの由来具合が左右されるので、このプロンプトのスキルをレベルアップする必要がある。経験と慣れも必要だ。

生成AIの素晴らしさの一つは、人間のクリエイティブな作業の一部を肩代わりしてくれることだ。将来は、人間の思考レベルを身に着けたロボットとの会話も実現するかもしれない。一方で、人間のクリエイティブな作業が奪い取られてしまう危惧もある。とくに絵画や音楽などの芸術系の生成に関しては、すでにこの種の問題が顕在化している。囲碁や将棋のように、スキル面で人間とAIが共存していければいいと思う。

これから、生成AIの技術がレベルアップするのは確実だ。学校教育やパソコン教室などでも、この利用技術を教えるときがくるかもしれない。ただ、多くのPCやスマホなどに何らかの形で、この技術を組み入れたとして、それが仕事や日常生活で高度に普及するかどうかはまだわからない。静観するか、勉強するかなど、考え方は



は人それぞれでいいと思う。

### あらすじで読む日本の名著

これまで文学に親しむことなど無縁の自分であったが、先達者の助言により、まずはあらすじだけでも読んでみたらということになった。そこで、「あらすじで読む世界の名著No.1〜3（中経出版）」を紹介してもらった。図書館に行つて、これらを借りて読もうとしたが、まずは日本の文学からと思い、「あらすじで読む日本の名著No.1〜3（中経出版）」を読み始めることにした。

この本は、全体の編者である高等学校の校長が中心になり、教職員が校務の合間をぬって、分担して各作品のあらすじを書いたものだ。シリーズの3冊には、作家52人、作品数78点が収められている。作品の選択基準などは示されていないものの、「日本の近代文学の名作」とされる作品は、おおよそ網羅できたのではないかとこの記述があつた。「読者離れ」といわれて久しい若者

が、読者に親しむ入口になればとの思いから企画されていて、どちらかといえば、自分たちのような高齢者を対象にしているのではなさそうだ。いずれにしても、日本近代文学の入門用としてこれらの本を出版してくれたことに敬意を払うべきだと考える。

内容的には、サブタイトルどおり、「近代日本文学の古典」であり、各作品のあらすじである。これらの本自体の発行年月は、2003年7月〜12月で、相当に古いものだ。対象が古典なので、あらすじの作成年月が古くても、その内容に影響はない。対象となっている作品は、すべて著名な作家によるものばかりである。

しかし、あらすじとはいえ、1冊20数編、合計78作品を読み進めていくのは大変である。自分にとっては、まとめて一気に読むのは苦痛そのものであつた。本のサブタイトルには、「近代日本文学の古典が2時間でわかる」となっており、3冊を都合6時間で読了するところであるが、その数倍の時間は要した。それも丁寧に読んでいくわけではないので、普段、いかに本を読み慣れていないということを改めて痛感した。さらに云えば、集

中力がなく、読むのが遅いというのは能力の問題であり、自己納得するしかない。

この本で対象になっている近代日本文学の名作の書かれた年代とは、いつ頃だったのであろうか。各作品には、発売年または制作年が記されているので、年代を便宜的に区切り、年代別の作品数を計上してみる。明治は20作品(25.6%)、大正〜終戦は42作品(53.8%)、戦後は16作品(20.5%)である。最も古いのは、浮雲(二葉亭四迷)の明治27年で、明治30年以前の作品は数少ない。最も新しいのは、華岡青洲の妻(有吉佐和子)の昭和41年で、現代文学と呼ばれるような作品はない。全体の平均は昭和2年(1927年)である。

時代的には、自分たちの父母や祖父母が生きていたようなひと昔の時代だ。勿論、出版または制作当時の時代だけではなく、江戸期など、それ以前の時代背景で記述されているものもある。当然ながら、通信手段は手紙であった。ただ、電報については、早くから利用されていたこともわかる。交通手段も、軽便鉄道のような当時使

用されていた鉄道も登場する。今の若い人たちに、このような古い時代背景が受け入れられるのかは心配である。

自分にとっては、今回の多くの作品に対して、全体的に暗いイメージを受ける。時代が古いので仕方がないだろうか。テレビの大河ドラマや朝ドラなど、時代物のドラマでも、意図的に、画面を暗くする傾向があるのではないかと感じている。古い時代イコール暗いというのは、多くの人が共有している感じ方なのだろうか。

今回の作品を読んで、暗さのイメージを言葉にすると、貧しさ、病氣、死、悲しみ、男女間の愛、もつれ、戦争など、いくつもある。この時代、現在に比較したら暮らし向きの平均レベルは低かったし、医学レベルも低かったであろう。結核は不治の病で、作品のなかでも、これで亡くなった人は多くみられた。男女間の愛、もつれについては、作品の展開上の主軸となる場合も多い。当時は、遊郭などの風俗営業の規制は緩く、ストーリーのなかに組み込まれることも多い。戦争についても、終戦に

なるまで、常に身近にあった時代であったから、多くの作品に影響を与えている。なかでも、黒い雨(井伏鱒二)と夏の花(原民喜)は、広島原爆の凄惨さを生々しく伝える2作品である。

野菊の墓(伊藤左千夫)や二十四の瞳(壺井栄)は、悲しみや死、人間の愛を痛切に感じる作品である。どちらの作品も、多くの悲しさの中に、何か爽やかさが伝わってくる。とくに、二十四の瞳については、あらすじという短い文章だけではあるが、思わず涙を誘われてしまった。

今回、あらすじを読むというスタイルで、しかも早足で読んでいたので、各作品の良さを十分理解して読んでいるとは言い難い。それでも、一通り読み終えて良かったと思う。現代の人たちにすれば一昔前の古い作品だが、それぞれの父母またはその前の世代の時代の生き様を理解するための貴重な作品群である。後世まで残されていくべき作品群であろう。

## 現金のいるキャッシュレス決済

日本のキャッシュレス決済の比率は、2020年時点でクレジットカード決済が25.8%、デビットカード決済が0.8%、電子マネー決済が2.1%、QRコード決済が1.1%であった。また、2022年のキャッシュレス決済比率は36.0%となり、クレジットカードが30.4%、デビットカードが1.0%、電子マネーが2.0%、QRコード決済が2.6%であった。これらの数字から、日本ではキャッシュレス決済が徐々に普及していることがわかる。キャッシュレス普及の他国との比較については、日本のキャッシュレス決済比率は、2022年時点で36.0%となっているが、一方、韓国では94.7%、中国では60%、カナダでは62%、オーストラリアでは59%、シンガポールでは57.6%、スウェーデンでは48.9%、アメリカでは47%、フランスでは44.8%、ドイツでは17.9%となっている。これらの数字から、日本はまだキャッシュレス決済が普及している国に比べて遅れていることがわかる。

(Bingの生成AIの回答結果(2023/07/21時点)を参

考に記述)

2020年と2022年の日本のキャッシュレス決済の比率からは、クレジットカード決済の割合が高く、クレジットカード以外の決済比率は高くないことがわかる。そのなかで、QRコード決済は、2022年26%まで伸ばしている。それでも多くの企業であれだけ普及活動をした結果としては、十分でないかもしれない。やはり、クレジットカード決済に比べてわかりにくいことと、決済時にひと手間多いことがネックになっているからだろうか。2019年9月から2020年6月まで、政府はキャッシュレス決済の普及政策として、ポイント還元事業を大々的に実施した。実施期間の後半は、新型コロナウイルスの感染症が広がり始めた頃で、東京オリンピックも延期になったときであった。2022年のキャッシュレス決済比率が高くなったのは、このキャンペーンの影響が大きい。しかし、まだ普及率が他国に遅れているのは、対策がまだ不十分なのかもしれない。普及率の最も高い韓国では、キャッシュレス決済の一定額について所

得控除する政策を実施しているらしい。

現金のいるキャッシュレス決済と感じたのは、政府のポイント還元事業のときだった。それは近くのあるスーパーのプリペイド型の決済システムだ。プリペイド型もチャージ後は一応キャッシュレス決済だ。このスーパーのプリペイドカードは、チャージをするとなにがしかのプレミアムが付くようになっていた。しかし、現金でしかチャージできないのだ。現金が必要なキャッシュレス決済になっている。この決済システムの利用者は、スーパーにせっせと現金を持ち込んで、チャージしてから商品を購入している。それがキャッシュレスといえるのであろうか。このような形式があってもいいと思うが、当時、このシステムも政府のポイント還元の適用とされているから面白い。

テレフォンカードやハイウェイカードのように、プリペイド型の決済は、以前よりあった。SUICAもプリペイド型ではあるが、タッチ決済にしたのが画期的であった。しかし、SUICAも、VIEWカードを利用す

るか、モバイルSUICAを利用するなどして、クレジットカードからのオートチャージを行えば、現金不要のキャッシュレスであるが、切符販売機で現金でチャージしている限りは、現金のいるキャッシュレスである。

ETCは、タッチレス、キャッシュレスとして、モバイルSUICAより前に導入されている。車を走行させながら、決済するという画期的なシステムである。決済は、クレジットカードの後払いである。まだ自分の車がETCの装着がされていなかった頃、ETCを装着した車が颯爽とゲートを通過するのを見て、次に購入する車を、そのときETCで通過した車と同じ車種に決めたことを記憶している。いまでは当たり前になっているが、利用を始めた頃の、通過するときの心地よさは格別なものがあった。ただ、それまであったハイウェイカードがなくなり、5万円のカードを購入すると8千円のプレミアムが付く特典がいつの間にか消えてしまったのは残念だった。

キャッシュレス決済の方法については、これからも進

歩していくと予想される。今、注目を浴びているのは、クレジットカードのNFC（近距離無線通信）を利用した、かざすだけで決済できる方式だ。今のクレジットカードには、すでにICチップが格納されているが、これが非接触になると考えればいい。さらにスマホでも、クレジットカードをベースにした決済ができるようになる。タッチレス（コンタクトレス）、高ポイント還元がキーワードになるだろう。JR東日本のタッチレス改札やタッチレス決済レジの開発も進んでいる。

郵便局においては、キャッシュレスを使用できる窓口が、いつの間にか増えている。日本郵便は、2023年9月末までに、全国の約2万局すべての直営郵便局の郵便窓口にも、キャッシュレス端末を導入することを決定しているようだ。キャッシュレス決済の普及率のアップにつながるであろう。

現在の、自分の決済方法であるが、通信販売やスーパーではクレジットカードを使うことが多く、コンビニなどの少額支払いはモバイルSUICAを使うことが多

い。キャッシュレスでいけるものは、それぞれのキャッシュレス決済を利用しているので、キャッシュレス決済の比率は高いと思っっている。しかし、それでも現金を使用しなければならぬケースは多くあるので、財布にはまだまだ現金を入れているのが現状だ。まだ現金しか使えないケースで、気づいたものを列挙してみる。

- ・ 個人経営の飲食店
  - ・ 中小規模の病院
  - ・ 自販機（順次キャッシュレス決済対応に移行しているようであるが、まだ未対応のものも多い）
  - ・ ディスカウント系のスーパー
  - ・ 友人、家族などでの割り勘での飲食
  - ・ サークルの年会費などの支払い
  - ・ 忘年会、同窓会などの会費
  - ・ ゴルフ練習場の支払い（プリペイド式の練習場も多い、現金決済のゴルフ場もある）
  - ・ ヘアカット専門店
  - ・ 自動車免許の講習会や更新費用
- これら以外にも現金しか使えないことはまだ多くあ

りそうだ。現金の役割はまだまだ大きい。

キャッシュレス化の普及のなかで、もう少し大きな動きがある。中央銀行のデジタル通貨(Central Bank Digital Currency:「CBDC」)である。日本銀行は、「現時点でCBDCを発行する計画はないが、決済システム全体の安定性と効率性を確保する観点から、今後の様々な環境変化に的確に対応できるよう、しつかり準備しておくことが重要であると考えている」と慎重な構えである。しかし、実験も進めているようであるし、遠くない将来に、現金と並ぶ決済手段として、個人や企業を含む幅広い利用を想定した一般利用型のCBDCが実現する可能性がある。これが実現すれば、キャッシュレス決済は別次元のものになり、現行のキャッシュレス決済システムも再編されることも十分あり得る。また、数ある暗号資産も駆逐されるかもしれない。

スーパーや飲食店で、レジでもたもたしているのに遭遇すると、イライラすることがよくある。手間取るのは、

決済方法の問題だけではないように思う。レジに並ぶときには、支払いを行う準備をしておくべきなのだ。少しは頭の体操になる。いまでもセルフレジには並びたくない自分にとっては、みんなそうしたらいいのにと願っている。

## 都市公園

現在住んでいる住居の前には、2 ha くらいの中規模公園があるので、恵まれていると思っている。以前の居住地だった柏市や、印西市の周辺の公園は、やはり馴染みが深い。住居周辺の公園は、子育てのための遊び場として大切な要素である。

初めての孫がまだ小さいときに、その孫を預かることがよくあった。この孫を遊ばすために、一番利用したのが住居周辺の公園であった。それらの公園は、ほとんどお金がかからなかった。それでも、子供が喜ぶような公園を選ばなければいけないので、子供の年齢も考慮しな

から、ある程度規模が大きく、遊具などが充実している公園に行くことも多かった。また、同じ公園ばかりでは飽きるもので、いい公園がないか常に探している時期でもあった。その頃は、住居周辺の公園については、情報通であったし、また、多くの公園にお世話になった。

公園といってもいろいろあるが、居住地の周辺でお世話になるのは「都市公園」と呼ばれるものである。都市公園法に定められた、国または地方自治体が設置した公園のことで、いくつかの種類がある。規模や態様など種類、種別が定められ、住区基幹公園等（街区公園、近隣公園、地区公園）、都市基幹公園（総合公園、運動公園）、大規模公園（広域公園、レクリエーション都市）、国営公園、緩衝緑地等（特殊公園、緩衝緑地、都市緑地、都市林、広場公園、緑道）などと定められている。

令和3年度、日本の一人当たりの都市公園等面積は、約10.8㎡/人である。千葉県は9.92㎡/人で、48都道府県中、45位だ。東京都は、4.26㎡/人で、最下位である。千葉県内の市区町村では、令和2年度、富津

市の51.30㎡/人に続き、印西市は16.99㎡/人の第2位で、かなり高い数値であるといえる。

一人当たりの都市公園等面積で最下位の東京でも、公園の数や面積は必ずしも低くない。ただ、東京23区の一人当たりの都市公園等面積を、諸外国の都市と比較すると、かなり低い。それでも、東京23区には数多くの著名な公園が存在している。飛鳥山公園、上野恩賜公園、芝公園など歴史のある公園も数多く残されており、世界に誇れるものである。

過去に前述の孫とともに利用した公園のうち、主だったものを思い出しながら、それぞれの印象などをまとめてみたいと思う。場所は柏市周辺、印西市周辺の中規模から大規模公園を対象とした。年代などは順不同である。また、子供を遊ばせるという視点を重視した。ちなみに、その孫は女子で、当時の年代は、幼稚園から小学校低学年くらいで、およそ2005～2010年頃であった。

### （流山市総合運動公園）

流山市総合運動公園は、柏市から向かうと、柏神社から豊四季駅、諏訪神社を経て、流山の加河岸に向かう歴史的な街道（柏流山線）の南側に接している。流山市内でも最も大きい公園だと思う。公園の特徴は、充実した運動施設に加えて、無料のフィールド・アスレチックがあったことだ。この公園のもう少し北になるが、野田市の清水公園には、有料であるが本格的なフィールド・アスレチックがある。これに対比することはできないが、無料でもかなり充実したフィールド・アスレチックが、この流山の公園にあったのだ。また、この公園にはトータムポールが沢山あったことが印象的であった。最初は、何か異様な感じを受けたが、この公園のトータムポールは、トータムポール群としては日本一らしい。

### （柏の葉公園）

柏の葉公園は、TX柏の葉キャンパス駅の西側2kmくらいのところにある。広さは45haで、やや規模の大きい県立公園である。歴史的には、この場所は江戸期、幕



府直轄領の小金牧の一部であった。明治維新後、新政府は、東京にいる失業者や生活に困っていた武士の救済のため、この地を開墾地として彼らを入植させた。十余二村の一部であった。牧跡の原野は予想以上に厳しく、農業に不慣れな入植者が開墾に難行を極めた土地であった。この土地は、戦前のある時期から陸軍の柏飛行場として利用されたこともあって、戦後は、この公園をはじめとして、比較的規模の大きい土地利用がなされた。

公園の北側には、東京大学柏キャンパスの巨大な建築物が並んでいる。北東から南東にかけては、東葛テクノプラザ、国立がんセンター東病院、科学警察研究所、千葉大学環境健康フィールド科学センターなどが立地している。西側には、さわやか千葉県民プラザがある。公園の南側には、柏の葉公園住宅があるが、ここも、戦後、米軍の柏通信所があり、のちに返還された場所だ。

公園は、陸上競技場、サッカー場、テニスコートなどスポーツ施設が充実している。文化サークルや、会議室、和室なども多数ある。また、「緑の文化」といえるような、都市緑化の植物園にもなっている。ただ、遊具類は

十分とはいえず、子供を遊ばせるには最適かどうか疑問であった。

駐車場は有料であるが、県立公園ということで、「北総花の丘公園」と同じ料金区分だったのが印象に残っている。

#### （あけぼの山公園・あけぼの山農業公園）

あけぼの山公園・あけぼの山農業公園は、合わせて24 haの大きな公園である。布施弁天に隣接している。どちらも柏市都市部公園緑地課の所管である。あけぼの山公園は、日本庭園、茶室「柏泉亭」、水生植物園、さくら山とその近くの駐車場、あけぼの山農業公園は、本館（会議室、研修室）、風車、芝生広場とその近くの駐車場が対象区域ということだが、一般利用者には、その境界は判然としない。利根川の調節地とも隣接しているので、洪水があれば、低地部は、浸水の恐れのあるところでもある。

あけぼの山公園は、美しい自然の風景と景観などの趣（おもむき）や味わいを楽しむ公園であり、あけぼの山

農業公園は農業振興のための公園である。それぞれ特色のある施設が数多くある。公園内の自然は豊かで、花は一年中楽しめるようだ。とくに春の桜とチューリップの時期には多くの人が訪れる。チューリップ畑には、オランダ風の風車がある。桜、チューリップ、風車という組み合わせは、印旛沼の佐倉ふるさと公園と類似性を感じる。以前は、森の斜面に20種くらいのフィールド・アスレチックがあった。子供達にはちょうど良い遊び場であったが、平成25年頃に老朽化のため撤去されている。芝生広場に何点かの遊具が設置されたが、やはり子供達にはとっては、十分とはいえず、残念である。

### （手賀の丘公園）

手賀の丘公園は、手賀沼の沼部東端のフィッシュイング・センターから、直線距離で南へ1kmあまりの丘の上に位置している。野球場、テニスコート、キャンプ場、少年自然の家などが併設されている。自然が豊富な森の中の公園である。公園内にはバーベキュー広場があり、とくに休日には、多くの客が訪れているようだ。

この公園は、森の中にあることで、夏は涼しく、冬もさほど寒さを感じないのが特徴だ。無料で手頃なフィールド・アスレチックも充実している。お金をかけずに、子供を遊ばせるには、最適な公園である。公園内の北西の位置には、大きな恐竜の滑り台がある。この恐竜は、公園に接する道路から、顔だけが見えていたので、最初は驚いた。ひとつの名物のようになっているようだ。

### （鎌ヶ谷市制記念公園）

鎌ヶ谷市制記念公園は、新鎌ヶ谷駅から北総線に沿って、東へ1kmほどのところに位置している。この公園の広さは、4haくらいで、さほど大きな規模ではない。広い公園は目的の箇所にとどり着くまで時間がかかったりするが、ここは手頃な広さになっている。野球場とテニスコートが併設されている。野球場の周りは桜の木が植えられており、花見の時期は、多くの人が来園しそうだ。

入口から入るとすぐに、昔の飛行機と蒸気機関車が展示され、非日常の程よい演出になっている。その周りを

1回100円でバッテリーカーを乗ることができる。子供が楽しめるアスレチック遊具も何種類かある。

この公園は、北総線と接している。管理棟の近くに3階建ての展望棟があり、公園のすぐ脇の高架線を走るスカイライナーなどの列車通過を間近に見ることができるとか呼べるものであるが、迫力のある列車通過は、意外と楽しめる。

### （ふなばしアンデルセン公園）

この公園は、公益財団法人船橋市公園協会が管理している公園だ。協会は、船橋市から公園、緑地等の管理業務を受託している。公園は、船橋市の北東部、夏見小室線に接しているが、交通の便はあまりよくない。広さは38.3haあり、テーマパークのような公園だ。以前は、「わんぱく王国」という公園であった。

入園料金、駐車料金は有料で、公園内でも利用料金が設定されている施設が多い。それでも、リーズナブルな料金に抑えられていると思う。入園料金は、一般9

00円に対して、小・中学生200円、幼児100円で、極端に子供の料金が安い設定になっている。入園する大人は、子供の付き添いの場合が多いので、何か不合理さを感じる。

最近、たまたま休日に入園する機会があった。シニア特典で、いつの間にか入園料金は無料になっていた。そのときに驚いたのは、公園内の広場が、キャンプのテントで埋め尽くされていたことだ。最近流行りのデイキャンプだ。デイキャンプということは、以前、「利根川ゆうゆう公園」（我孫子市）のデイキャンプ広場でも見たことがあったので、すぐにわかった。

公園内は、多くの遊具、大型のアスレチック、アクティビティに加えて、風車、童話館、美術館などがあり、楽しむためのさまざまな工夫がなされている。費用を除けば、満足感が高い。ただ、手賀の丘公園などのような無料で手頃なフィールド・アスレチックはない。

デイズニールゾートのようなテーマパークもいいが、たまには家族の息抜きに、このような公園を訪れてもいいのではないだろうか。

## 〔北総花の丘公園〕

北総花の丘公園は、北総線千葉ニュータウン中央駅南口から、徒歩15分くらい（Bゾーン管理棟まで）のところに位置している。広さが、36.1haの県立公園である。公園は、AとEの5つのゾーンから構成されている。それぞれのゾーンには、ゾーン名が冠されている。公園の全体のテーマは、植物を通しての文化・情報とコミュニケーションの発信で「集い」「遊ぶ」「学ぶ」を特徴としている。この公園は、千葉ニュータウン中央駅南側の造成に伴って開園したもので、戸神川を調整地として機能させ、自然を残す形で、宅地と公園を一体として開発したものである。公園には、昔からの里山といえる箇所が多く残されている。ちなみに、Bゾーンの修景池は、戸神川の支流の名残である。池がL字型になっているのは、多々羅田からの川と原山からの川の合流点であるためだ。この川は合流後、北総線の辺りまで北へ流れ、そこで方向を西向きに変えて、戸神川の本流に合流していた。公園の名称に、「花の丘」を使用しているが、自然の保全を象徴する植物としての「花」と里山の「丘」を結

合して命名したのではないかと勝手に考えている。なお、余談ではあるが、本誌のタイトルは「草の丘」であるが、この公園の風景を表紙などに採用している。草は花より地味で、控えめであるが、違いのニュアンスは十分伝わっていると思う。

この公園は南北に長い。グーグルマップで測定すると、1・8km以上ある。それも5つのゾーンに分かれていて、各ゾーンにはそれぞれ特徴を持たせている。

Aゾーン（水の景）は、広さはないが、戸神川の調整池の方を、ゆっくり眺められるのがいい。Bゾーン（都市の景）は、管理棟周囲の円形部分や修景池の配置がよく、全体にゆったり感がある。Cゾーン（水の景）は、戸神川沿いの自然を感じながらの散歩ができる。南端（草はら広場）からせき止められた戸神川の調整池の全体を見ることが出来る。いつも自転車のコースとして利用させてもらっているが、一休みするのにちょうど良い場所だ。Dゾーン（道の景）は、里山を感じながらの本道の散歩コースを楽しめる。Eゾーン（緑の景）は、

自然のなかにドッグランやバーベキューガーデンが配置されている。なかでも、西側へ階段を下りれば、自然生態園があり、里山の自然観察や水辺の植物・昆虫などを観察することができる。また、公園内と園外の谷津田がシームレスに調和しているのもいい感じだ。

いろいろな特徴のある公園であるが、一つ不足しているものがある。それは、遊具とかアスレチック類の施設がほとんどないことだ。公園のテーマと合わないのかもしれない。自然とふれあうのは大切であるし、ドッグランもいいと思う。しかし、加えて、将来を託す子供達には、もつと楽しみながら自然にふれあってほしいと思う。そのためには、公園内に、子供達を呼び寄せるような遊びの要素がもつとあってもいいのではないだろうか。

取り上げたかった公園は、もう少しある。「21世紀の森と広場」、「行田公園」、「手賀沼自然ふれあい緑道」、「松山下公園」、「白井運動公園」、「佐倉ふるさと公園」、「利根川ゆうゆう公園」などだ。

ここで、とりあげた公園は、ほとんど無料の公園で、

大変ありがたいことだ。このような形で公園を利用できるのは、東京郊外に居住しているからだと思っている。これからも、公的な子育ての場所として、憩いの場所として、ますます充実していただきたいと思う。



アンデルセン公園「平和を呼ぶ」像